

「博物館行き」、 それとも「ミュージアムする」

佐々木 亨
北海道大学文学研究院教授

ミュージアム研究やその関連分野についての雑誌には、いろいろなものがあります。私が所属する北大文学研究院の博物館学研究室にも、多種多様な雑誌が書棚に置かれています。その中に、一般の方にはあまり馴染みがないですが、2014年に休刊となった文化環境研究所発行の『Cultivate(カルチベイト)』という雑誌があります。この雑誌はほかの多くの雑誌とは異なり、一歩先、いや半歩先のミュージアム界を論じていて、同研究所メンバーや雑誌編集者のセンスの素晴らしさをいつも実感していました。その最終号である43号は特集「SNSが拓くミュージアムリテラシー」で、さらにその最後の記事は、システムデザイン・マネジメントがご専門である本間浩一さんへのインタビュー「ミュージアム×SNS－分解と再構築から生まれる新たな空間－」でした。最近、再びこの記事を読む機会があり、約10年前によくここまで予測できたと驚くとともに、この予測が2023年の現在において、ごく近い将来にはきっと現実になるだろうと感じます。

記事の冒頭で、SNSは「フロー」「参加性」「ノンリニア」なメディアである。一方ミュージアムは「ストック」「権威性」「リニア」であり、まったく対照的であるとしながらも、SNSの進化に伴って、新たなミュージアムの創成に向かう、という見立てを示しています。本文で本間さんは、インターネットやSNSが普及すると、「もはやミュージアムだけが支配する独立空間というものはなく、あるテーマに関して、それがミュージアムにあればミュージアムに行き、図書館にあれば図書館に、映画にあれば映画館に行く時代です。境界はあいまいです」とした上で、「階層的な博物館同士の構造や、博物館を中心として市民が帰属するようなスター構造ではなく、様々

な要素のネットワーク構造になっている」と言っています。これはいま現在、すでに多くの人がそう認識しているのではないのでしょうか。さらに「博物館の学芸員は狭き門を通り、長い時間をかけてオーソリティーになります。そのオーソリティーの考えに基づいて、博物館の展示を通して私たちは資料に接することができます。(中略)現実世界の物理的な制約上で生み出された美しい仕組みだと感じます。一方、極端に言えば、技術の進化によって、全ての資料がデジタル化されれば、一般市民が自らの知見と意志に基づいて、元々の資料を選択して見ることができる時代が来ました。その時、社会が必要とするオーソリティーはどういうものでしょうか」と鋭い指摘をしています。いままでの博物館の機能は展示に特化されていましたが、デジタル化によって、展示に限らず、館全体をどのように捉え、利用していくのかという「リテラシー」の問題に変わっていくとしています。つまり、オーソリティーとしての学芸員が「博物館行き」となった資料にどんな価値を吹き込むのが重要なのではなく、様々な要素のネットワーク構造になっているミュージアムを、利用者としてどう使うのか＝どう「ミュージアムする」のが重要と主張しています。ミュージアムとデジタル化およびSNSとの関係を現実に即してなんとすっきりと整理した記事だろうと、私は捉えました。

さて、この記事を読んでしばらくして、2月11～12日に本プログラムのクロージングフェスタがありました。11日の講演と対談では、進化するブランド化の話しでも、評価ワークショップのプロセスの話でも、異質な要素が入り込んだり、関係者全員で対話し合意形成していったりと、限られたオーソリティーが主導する世界ではない

という点で共通していました。また翌12日に開催した「地域とともにあるミュージアムのあり方を考える情報交換会」では、18名の参加者がありました。そのうち、道内のミュージアムスタッフが11名で、ほかの7名はミュージアムグッズ愛好家、総合まちづくり会社スタッフ、総合広告会社スタッフ、アーティスト、北大CoSTEPスタッフ、そして大学の学部学生2名で、ミュージアム愛をもって日常的に「ミュージアムする」メンバーでした。この会の報告(p.52-53)で本プログラムスタッフのWeiさんが書いているように、「博物館が権威性を自ら薄め、利用者との関係性を見直す風潮にも繋がっている」と捉えることができるグループディスカッションの成果が多かったのがとても印象的でした。

期せずして、本間さんの記事に書かれているようなミュージアムで起こっている状況の一部が、この両日、とりわけ12日の情報交換会において、目の前で現実展開されました。このことに驚くとともに、言葉では上手く言えませんが、何か大きな転換点となる現場に居合わせたような興奮を感じました。きっと2年目以降の本プログラムのフックがここにあると考えます。

